

の途中で偶然出会った方々が私に最大の包容を与えてくれた。乾いた中国北方から来たこの私に横浜は、潮風とともに一番優しい思い出を残してくれた。私にとって今

回の訪問経験は一生の宝物となり、それは今後の研究人生において必ずや助けになるだろう。

日本の外国人陶芸家たち



Liliana Granja Pereira de Morais
(サンパウロ大学大学院)

2013年に始めた実地調査の続きとして、今年はこのテーマに関する知識を深めることに重点を置いて取り組みました。そのために、陶芸に特化した美術館を訪れ、2人の工芸・陶芸専門家にお会いしました。私が訪れたのは五島美術館、島山記念館、日本民藝館、出光美術館、三井記念美術館、東京国立近代美術館、根津美術館、箱根美術館です。お会いした専門家は、東京の西福ギャラリーのオーナー兼館長の青山和平さん、東京国立近代美術館の学芸員の木田卓也さんです。そのほかに、東京藝術大学、上智大学、東京国立近代美術館図書館にて去年よりも多くの書誌調査を行いました。

私が今年訪れた陶芸美術館のほとんどが、茶道と楽茶碗の展示会を行っていました。禅宗の影響を受けた安土桃山時代（1568～1600年）の茶の美学は、ほとんどの外国人が日本に対して持つイメージの構築に大きな役割を果たしました。千利休の指導を通じ、楽型もまたこの時代の禅の美学から生まれました。やがてアメリカ人陶芸家ポール・ソルドナーを通じて、アメリカでも用いられ普及されるようになりました。今ではアメリカン・楽として知られています。

私は昨年の研究を通じて、インタビューをした陶芸家のほとんどが日本の陶芸に対して以下のような共通のイメージを持っていることに気がきました。陶芸を芸術として受け入れていること、作品の機能性と使い道により重点が置かれること、手作りの作品により大きな価値が与えられること、地元材料を使っていること、食べ物・季節・陶芸とのつながり、自然との近さ・自然が過程の1つとみなされること、質素で不完全なものが美しいとされること、修行の過程が厳しく長いこと、出来あがったものと同じくらい過程も重要視されること、です。

私は外国での日本人陶芸家に対するイメージは、民芸が大きく影響しているのではないかと考えています。民

芸も禅宗の美学がきっかけで起こったものです。1926年、柳宗悦により日本の急激な産業化と都会化に対抗して民芸運動が起こりました。民芸運動では、名前の知られていない庶民の職人によって日常生活で使うために作られた、ごく一般的なものの美しさに価値を与えようとなりました。この民芸の思想は、日本人陶芸家・濱田庄司がヨーロッパとアメリカで行った会議や実演を通して西洋に広められ、イギリス人陶芸家バーナード・リーチにより「リーチ派」として西洋的なものへと形を変えていきました。

また、1946年から1949年の間、濱田と師弟関係にあった益子出身の人間国宝・島岡達三も、西洋における日本の陶芸の普及に大きく貢献した人物です。師匠（濱田）と同じく、島岡も世界を回って講義や展示会を開き、益子にある自身の窯でも多くの外国人に指導しました。私が昨年インタビューをしたユアン・クレイグも島岡に教わった1人です。

昨年の調査で、日本で活動する外国人陶芸家の多くは男性であることにも気がきました。確認できた19人のうち、女性は4人だけでした。今年はさらに7人の（日本で活動する、あるいは活動していた）女性陶芸家を見つけることができたので、彼女たちへのインタビューを通して、日本人陶芸家の男性優位の世界において女性であることの難しさを探りました。そのうちの1人、北鎌倉在住の清水和子さんは、昔は女性は不純だとされていたため窯には入れなかったとおっしゃっていました。日系ブラジル人の陶芸家・後藤レジーナさんは伝統的な日本の陶芸界で働く女性が少ないことに関して、それが汚れ仕事で重労働だからだと述べていました。日本にいる外国人陶芸家の多くが男性である理由を日系アメリカ人のルリさんにお聞きしたところ、伝統的な日本の陶芸は身体的にとっても重労働であるため、日本以外の国でもほとんどの窯は男性が所有しているが、特に過去10年



から15年の間、あらゆる所でこの世界に入り窯を持つ女性が増えてきているということです。最後に、1993年から京都で活動しているポルトガル人陶芸家のクリスティーナ・マールさんは、世界的にみても家庭生活とは別のことに取り組むのは女性よりも男性の方が多いが、日本では特にそうだとおっしゃっていました。その理由としては、日本は家庭中心の社会であり、その日本の核

となる部分を支えているのは女性であることが挙げられました。そのため、女性が専門的な職業にフルタイムで従事することはとても難しいということです。

「日本における外国人陶芸家」というテーマで研究するうちに多くの疑問が生じたため、また、将来博士号を取得するためにさらに分析を深めたいと思います。

植民地期の朝鮮の工業化と地域社会 —朝鮮窒素肥料株式会社の事例を中心に

梁 知恵
(漢陽大学校)



私は2014年2月11日(火)から27日(木)まで、訪問研究員として神奈川大学非文字資料研究センターを訪れた。滞在中にはセンターの配慮のおかげで、関連史料館を訪問し、多くの研究者と面談することができた。

訪問研究テーマは「植民地期の朝鮮の工業化と地域社会—朝鮮窒素肥料株式会社の事例を中心に」である。朝鮮窒素肥料株式会社(現在は水俣病の原因企業として知られているチッソ)日本窒素肥料株式会社の植民地子会社である。この会社は水力発電所を設立して工業用の電力を生産し、ここで得られた水力発電を基にして咸鏡南道の咸興、興南に大規模な化学工業団地を設立した。

いわゆる、「日窒コンツェルン」の中心を形成したこの地域の特徴は、大きく3つにまとめることができる。まず、帝国型工業開発の主要な事例としてみられる点である。企業主の野口遵は親会社の本社を大阪に、子会社の本社を京城に設立したが、実質的には主要な工場がある熊本県の水俣と宮崎県の延岡、そして朝鮮の咸鏡南道地域を巡回しながら企業を導いた。換言すれば、この事例は日本帝国の企業が形成される過程の主要な断面をみるることができるともいえる。

2番目は企業の進出と同時に行われた企業城下町の形成に関してである。植民地時代の企業の背後にある都市は建築史や都市計画史的にも非常に重要な事例である。さらに、社会史的にも土地の補償(不動産)の経済と日本の本土から植民地への移住に伴う中産階級の経済を示す非常に重要な事例でもある。

3番目は軍産都市という点である。化学工場の特性上、1930年代後半に戦時体制が本格化される過程の中で、

この地域での軍需工場や軍需用職業訓練所などが急激に増設されていった。またこの時期に海軍との技術協力、委託事業が推進されており、イギリス軍人とオーストラリア軍人の捕虜収容所が設立された。

このようにこの地域は植民地期の朝鮮の社会経済史を説明するために重要な事例として取り上げられてきた。しかし、従来の研究は「植民地近代化論」と「植民地収奪論」という二つの極端な立場を立証するための手段としてこの事例を挙げたことが多かった。私は個人、集団、ひいては国家に至るまで、さまざまな層位を設定し、これらの間の「関係網」という概念を使ってこの事例にアプローチしてみようと考えている。つまり、既存の研究では工業団地という「規模の経済」に焦点を当てていたが、私は具体的な行為者に焦点を合わせて、個人インタビューと文献資料収集を通じて研究を進めている。

今回の訪問調査期間には神奈川大学図書館と非文字資料研究センターをはじめ、国立国会図書館、拓殖大学の旧外地関係資料コーナー、学習院大学の友邦文庫などの資料館を訪問した。植民地時代に発刊された複数の関連史料と回顧録などを収集することができた。また、森武磨指導教授と4名の研究者を同うことができた。まず、君島和彦教授は教育史、特に歴史教育者として韓国では日韓関係史における非常に有名な学者である。口述インタビュー時の留意点と私の研究テーマの妥当性について説明していただき、研究者としての姿勢に関して非常に貴重なお話を聞くことができた。そして小野沢あかね教授はジェンダー史の研究者として軍の慰安婦問題などを研究してきた学者である。研究テーマについて貴重なアドバイスをしてくださった。柳沢遊教授は経済史専攻で